

父も死の灰浴びた「被害者救済を

人類史上初めて水爆実験による犠牲者が出た米国のビキニ環礁での核実験から70年の1日、マーシャル諸島共和国の首都マジュロで「核被害者追悼記念日」の式典が開かれた。当時漁船員だった父親が「死の灰」と呼ばれる放射性降下物を浴びた下本節子さん(73)＝高知市＝が参加した。



下本さんの父親は1954年3月1日の水爆実験時、周辺海域を航行したマグロ漁船「第七大丸」の乗組員、大黒藤兵衛さん。2002年に胆管がんで死去



ヒルタ・ハイネ大統領に折り鶴を寄贈し記念撮影する高知県の下本節子さん(右)と濱田郁夫さん(中央) 3月1日、いずれもマーシャル諸島マジュロ、花房吾早子撮影

現地被曝者と交流「声」つなぐ決意

した。長女である下本さんは、元漁船員や遺族が国に補償を求めている訴訟の原告団長を務めている。

人生初の海外旅行で日本から約4500キロ離れたマーシャル諸島を訪れた下本さんは、原水爆禁止日本協議会(日本原水協)のメンバーらと式典に参加した。

その後、ヒルタ・ハイネ大統領主催の昼食会に招かれた。

大統領らの前でスピーチをした。父の体験を織り込み、ぎりぎりまで修正を続けた原稿を読み上げた。

「被害を与えた国は責任を取り、被害者を救済するべきです。黙っていると、なかったことにされてしまいます」

大統領に折り鶴を寄贈し、記念撮影した。

水爆実験では、マーシャル諸島ジャーナルの記者

プ環礁では島民86人(うち胎児4人)の多くがやけどを負い、別の島への移住を重ねた。

3日間の訪問中、ロンゲラップ環礁で育った女性2人と交流した。2人とも下本さんと同世代の70代で、幼い頃にビキニ水爆実験で被曝した。

繰り返す流産、奇形児の出産、家族に広がる甲状腺異常、そして、がんによる父の死。「人生そのものが狂わされた」「自由に生きる権利が奪われた」

2人からそんな言葉聞いた下本さんは、「補償してもしても、し切れない。彼女たちの人生を戻すことができたなら、それが初めて補償なのかもしれない」と思った。

島唯一の新聞「マーシャル諸島ジャーナル」の記者

「よう頑張ってるなあ」。同行した元中学校教員で、太平洋核被災支援センター共同代表の濱田郁夫さん(64)＝高知県安芸市＝は感嘆した。高知では運動に行き詰まり、葛藤する時もある。「下本さんがマーシャルの人たちから力をもらって、元気になっていく気がする」

2日朝、滞在を終えた。高知に戻ったら、送り出してくれた裁判の仲間、お年寄りの体操教室、お茶会、と色々な報告会が待っている。

「私がここで見て聴いて体感したことをみんなにも感じてほしい」。いつも携帯し、メモを続けた小さなノートを見返して、発信しよう。今度は自分が、高知で、日本で、つながりを広げよう。帰路に就きながら、そう決意した。



ロンゲラップ環礁の被曝(ひばく)者2人と交流を終え、目に涙を浮かべる下本節子さん(中央)＝2月29日

川大介

(花房吾早子＝マジュロ、蜷)